

図1 アイヌ語の川をあらわす語
に由来する地名(東北地方)

里芋とアイヌ語地名

はじめに

日本文化に関する包括的な展望の提供者、民族学・文化人類学の大林太良は、著書『東と西 海と山』の中で、日本の文化領域の中での九州の位置を述べ、中でも南九州は一つの下位地域をなしているとして「小野重朗や下野敏見の努力により、おそらく古代の隼人に遡ると思われる習俗や民具、そしてそれらの分布地域も明らかにされ」たとして「これに反して古代蝦夷系の民俗とは何か」といふことは、今日まで明らかにされて「いない」としてゐる。¹⁾

古代蝦夷の民俗に関する大林のこの発言は、実は、井上辰雄・谷川健一との座談会(『歴史公論』一九八四年十二月号)の際、述べたものの繰返しである。ここから、大林の目から見て「古代蝦夷の民俗は何か」の問いに答えるべき研究は、一九八四年、八六年までも、またおそらくは一九九〇年までも存在していないことが分かる。ところで大林は、同書の五頁前で、山田秀三のアイヌ語地名の研究により明らかとなった

安野 眞 幸

「東北地方を南北に両分していた境界線」を取り上げ、次のように述べている。

内(ナイ)とか、別(ベツ)という、アイヌ語の川をあらわす語に由来する地名は、東北地方では、東は仙台の北の大崎平野、西は山形・秋田県境をなす線の北に、集中的に分布している(図1参照)。そして、この線はほぼ奈良時代における北の蝦夷、南の和人の境界でもあった。おそらく蝦夷は今日のアイヌ語に親縁の言語を話していたことと思われる。

ここで大林は「奈良時代に東北地方を南北に両分していた境界線は、その後どうなったのか」を問い、さらに「この線は、今日の民俗においても大きな意味をもっているであろうか?」と問い直している。蝦夷の民俗を明らかにしようと願うわれわれにとって、この問いは魅力的である。しかし大林は、前述した「古代蝦夷の民俗」をテーマとした民俗学関連の研究蓄積のなさを踏まえてであろうか、「私は今のところ、そのような区分を支持するような例を思い出さない」としているのである。

一方、大林が「東北地方を南北二つの下位領域に区分する根拠はない」「私の利用した分布図は、むしろ東北地方が一つの大きな領域に属していることを示唆している」として挙げた例は、①「民家の形式」や②「社会組織として」本分家集団をエドーシと呼ぶ」ことや「隠居が分住・別居」する慣行である。大林はここから、むしろ「東北地方においては、太平洋側と日本海側とに二分される傾向がしばしばみられる」とし、「古代蝦夷の段階においても、生活様式においては、奥羽山脈の東と西では、ある程度の相違があったことを予想させる」と述べている。

確かに太平洋側は夏の間北の海から吹き付ける冷たい「やませ」の影響で低温が多く、冬は少雪なのに対し、日本

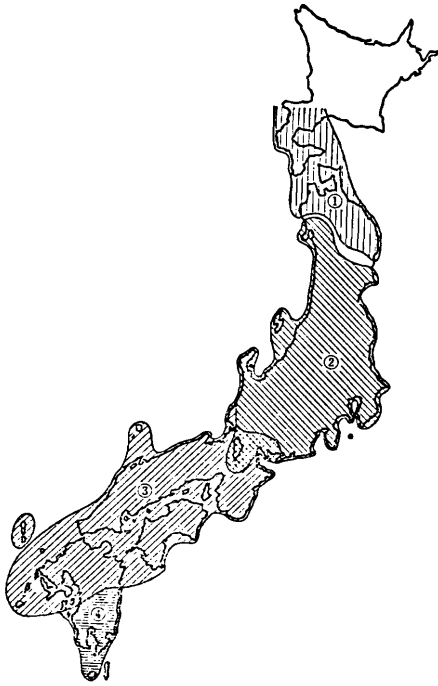


図2 弥生式時代文化地図(江坂輝弥氏原図)

海側は日本海流の影響で夏温かく、冬は雪国となるなど、東北地方を東西に二分することには十分な根拠がある。しかし大林は、さらに「文化領域や境界線は時代を超えて持続する傾向が見られるのだが、東北地方の北半と南半の区分については認められない」「蝦夷と和人の対立する文化的伝統が東北地方を二分して今日まで継続しているわけではない」「全体的に見れば、東北の民俗は和人の民俗だ」とまで断言しているが、はたしてそれで良いのだろうか。

大林自身も認めているように、少なくとも歴史学・考古学の世界では、古墳時代・奈良時代のおよそ五百年間、この線が現実に東北地方を南北に両分しており、「蝦夷とは何か」を論ずる際大いに注目されているのである。古墳時代を象徴する「前方後円墳」や大化前代の「国造」の分布の北限は共にこの線であり、また同時代の東北地方に見られる北海道式土器の南限もこの線なのである。大林が言うように「文化領域や境界線は時代を超えて持続する」のが一般なのに、本当に「東北の場合は認められない」のだろうか。

これに関連して話題となるのが稲作の問題である。江坂輝弥の「弥生式時代文化地図」(図2参照)に見られるように、かつて東北北部は北海道と同様稲作の伝播しない地帯と考えられていた。しかしながら、津軽平野の田舎館村垂柳遺跡からは、今から

二千年以上も前の弥生中期の、また続いて砂沢遺跡からは弥生前期の水田が発掘されたことから、水田稲作が東北北部に及んでいたことは確実となった。このことは新聞でも大きく報道され、北東北はこれまで北海道のアイヌ世界に近いとされてきたが、それは誤りで、北東北は南東北と同様、古くから日本に属していることが強調された。

現在、津軽地方を含め秋田・山形・宮城など東北は全体として稲作の盛んな日本の穀倉地帯である。これに対して、かつて北東北には稲が出来なかった・弥生文化は及ばなかったとの学者の説は、現在の在り方と異なっているので、北東北の人々には北東北異質論を意味し、認めたくない過去であった。それゆえ、垂柳・砂沢遺跡から水田遺構が発見されたことは、学術的に大きな意味を持つばかりか、一般の人々には、北東北は弥生時代から水田稲作地帯で、異質ではなかったことの証拠となり、一種の劣等感からの解放をもたらすニュースとして、歓迎されたのである。

しかし、一九七四年に行われたシンポジウム「北方の古代文化」²⁾の中で、考古学の石附喜三男は「弥生文化の北限」についてAのように述べている。また最近「蝦夷論」で活躍している考古学の工藤雅樹³⁾も、Bのような主旨のことを述べている。

A 最初に弥生文化の観点から申しますと、だいたい伊勢湾、若狭湾のあたりをつなぐ線まで、弥生式時代の前期にかなり急激に伸びてきますね。そこでいったんストップしてしまおう。そこからさらに東のほうに展開するのは、かなり縄文文化の濃い弥生文化として伸びていくわけですが、仙台平野までではやはりそれがいったんストップする。だいたい宮城県の北部ぐらいまで、それと山形県の範囲まででストップするということはいえるだろうと思うんです。(中略)だいたい仙台平野までの弥生文化の遺跡ですと、たとえば収穫具としての石包丁とか、糸によりをかけるのに使った紡錘車が出てきます。機械技術というのは弥生文化のまた一つ大きい特徴で、そういう

ものが仙台平野までは見られるのですが、田舎館の遺跡なんかからはぜんぜん出てこないんで、やはり田舎館の遺跡が稲作を行ったとしても、仙台平野までの弥生文化とはかなり異質な感じがするんです。

B この垂柳遺跡からは縄文文化に連なる土偶や石鏃も同時に出土するので、垂柳人は稲作によって従来の生活を一変し、弥生文化に帰依したのではなく、狩猟・採取の縄文的な生活・信仰をしていたと考えられ、またその後の気候の寒冷化で、稲作前線は一挙に南下し、古墳時代の五世紀頃には日本海側では新潟平野、太平洋側では仙台平野、大崎平野を北限とし、内陸部では会津盆地・米沢盆地、山形盆地が北限となった。

工藤の考えに従うなら、南東北に、水田稲作や畑作などの農耕に生活を大きく依存する弥生文化が見られるとき、津軽など北東北の人々は縄文時代とあまり変わらない生活を行い、一時期稲作をその生活の内部に採り入れたが、その後の寒冷化の中で、稲作を捨てて再び縄文の世界に戻っていったと纏めることが出来そうである。古墳時代・奈良時代の東北の蝦夷たちが北海道と同じ縄文人なのか否かは、大きな問題であり、工藤説についていろいろ考えてみなければならない。

それとはともあれ、今私がここで問題として取り上げ、論じたいのは、大林の立てた問い「奈良時代に東北地方を南北に両分していた境界線が、その後どうなってしまったのか」「この線は、今日の民俗においても大きな意味をもっているのであろうか？」なのである。私は専門的な民俗学の研究者でなく、特別学問的な訓練を受けた経験もないが、二十年近く津軽に生活するものとして、南九州で小野や下野が行ったと同じような北東北の民俗を研究することは、出来ないだろうか。

一 芋煮会

「東北の秋は《芋煮会》で一色だ」などと言われ、「芋煮会」は東北の秋を代表するものであるという。仙台に長くいる私の友人は、東京で遇うたびにこの「芋煮会」の楽しみを語ってくれた。気の合った仲間たちと河原で鍋を囲み、酒を飲み交わすのだという。「芋煮会をやったか」と尋ねることが秋の挨拶で、いろいろな仲間と何度も鍋を囲むという。山形県・宮城県・秋田県横手出身の弘前大学の学生に聞くと、「芋煮会」とは、町内会の行事であったり、遠足や運動会と並ぶ秋の学校の公式な行事で、どこかの鍋がおいしいか、味比べをした経験を持っている。

この「芋煮会」はもともと山形で盛んだったものだが、最近仙台地方にも及んだものだそうだ。鍋の中には里芋・こんにゃく・肉・ねぎなどを入れるのだが、何でも仙台と山形では鍋の味が違い、仙台が味噌味で豚肉を使うのに対して、山形が醤油味で牛肉とのことである。この「芋煮会」について、作家の戸川幸夫は昭和七年旧制山形高校入学当時も盛んだった山形名物の芋煮会の思い出を、「わが山高時代の芋煮会」と題し『日本の食生活全集⑥』『聞き書き 山形の食事』⁽⁴⁾（以下『山形の食事』と略す）の「月報」に小文を寄せている。

その中で一番関心と呼ぶのは『《男女七歳にして席を同じうせず》といった風習が厳然として守られていた」ころなのに「秋の行事として行われるこの芋煮会の時ばかりは例外で、男女交際が大目に許されていた」として、次のように述べているところである。

場所取り役の忘れてならないのは女子師範学校の生徒たちが屯する場所の近くを占拠する事だった。不思議なもので心伝心と言うか敵もわれわれの近くに陣取るのが通例だった。やがて煮炊きが始まり酒が回ってくると、口

がうまくて強心臓の奴が物見の役に選出される。これが女子師範生徒たちの陣営に乗り込んで、「うまそうだな、やっぱり女子でなければ駄目だ、俺らんところはさっぱり味悪くて……」と、切り出す。敵にも勇敢なのがいいて、

「だば俺（その頃の山形女性はこう言った）味付けてやっか」

「頼む」と物見役は彼女をわが陣営に連れ込む。それがきっかけで両陣入り乱れ、

「いっそのこと一緒になんべや」となる。その後、どうなるかって？時代が時代ゆえ日暮と共に

「面白かったスヤ」と一言遺して右ひだり。翌日からは町で合っても知らん顔の半兵衛であった。

芋煮会の場所が「河原」で、そこでは普段許されない「男女交際」が大目に見られたとあることから、この芋煮会の場には網野善彦の言う「無縁」の原理が働いていることは明らかであろう。となると、こうした会食の習慣はかなり昔からあったと思われる。

例えば、日本の古代社会の有様を記した『風土記』には、人々は春秋に温泉や磯、泉、丘などに集い「うたげ」を行ったとある。また伊藤幹治は『宴と日本文化』⁵⁾の中で、こうした野外の祝宴Ⅱ「うたげ」の古俗を「カガイ・歌垣・山遊び・磯遊び・花見」等々と数え上げている。現在の「芋煮会」が古い時代の「うたげ」の有様を想像させることから、「芋煮会」はかなり昔からの風習のように思われるが、『山形の食事』所収の「山形の食とその背景」⁶⁾には次のようにあり、「芋煮会」は明治の中ごろから始まったとしている。

起こりについては定かでないが、明治の中ごろから山形市周辺にはじまる。里芋は貯蔵がむずかしいので、冬を

前に親しい仲間同志が持ち寄り、河原でいもご汁の会食を楽しんだのが、しだいに広がったものである。

ところで『山形の食事』をより詳細に眺めると、「芋煮会」と直接関係のありそうな山形の郷土料理に、次のものがある。

- ① 「いも子汁」⁽⁷⁾ ……村山盆地では、いも子・鶏肉・こんにゃくを煮て醤油で味を付け、ねぎを最後にに入れて作る。
- ② 「いものこ汁」⁽⁸⁾ ……県北最上では、いものこ・ねぎ・油揚げ、たまには鶏肉を入れて味噌または醤油で味を付ける。
- ③ 「いもご煮」⁽⁹⁾ ……県南置賜で作るが、これには以下のような説明があり、「いも名月」と関係あることに注目。

秋十三夜、いも名月には必ずいもごをお供えする。いもごはきれいに洗って皮をむいてゆでて、五つまたは七つと奇数の数を皿に盛り、お供えする。

家族の食べる「いもご煮」は、いもごの皮をむき、大きいのは二つくらいに切ってなへに入れ、一口大に切ったこんにゃく、乱切りのにんじんを加え、醤油味で煮る。煮たつてくると、汁がふきこぼれるから注意する。

いもが五分どおり煮えてきたら味をとのえ、鶏肉や生いかなどを入れて再び煮る。だいたい煮えて火から下ろす直前、ぶつ切りにしたねぎを入れ、ひと煮たちさせてできあがり。これに、きのこや大根を入れることもある。しめじなどが入ると最高のごちそうになる。

この説明によれば、「お月見」「十三夜」に「いもご」をお供えすると共に、家族が「いもご煮」を食べるとあり、置賜地方の郷土料理「いもご煮」は家族の「うたげ」で、純然たる家庭料理である。他方「芋煮会」とは、家族を超

二 津軽と里芋

東北地方は「芋煮会」が盛んだとはいえ、私はこれまで津軽において「芋煮会をしよう」との誘いを一度も受けたことがない。前述の学生たちにこのことを言うと、皆一様に「津軽は東北地方の芋煮会ではないのにならうか？」と不思議がっていた。しかし「芋煮会」の代りに、野外で大勢で「きのこ汁」や「豚汁」を食べることは、津軽において私も何度も

よりも個人が尊重される近代という時代を想定することが許されよう。

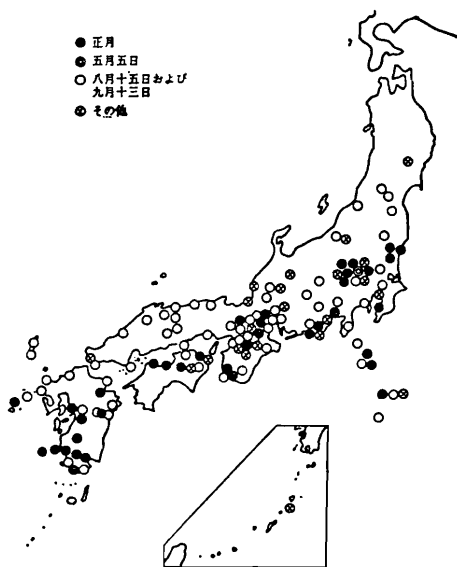


図3 儀礼食物としての里芋

えた人々と「川遊び」など、野外で行う「いもご煮」の会食・祝宴であり、「無縁」の原理の働く「うたげ」である。また「お月見・九月の十三夜」に里芋を食べる習慣は、本間トシ（図3参照）や後述する坪井洋文の研究などから、置賜以外にも南東北、さらに広く日本全国に多く見られるもので、里芋の収穫祭という。

以上から、「芋煮会」のルーツは秋の里芋の収穫祭であり、山形においては、古くは家族で祝う家の祭であったものが、明治の中ごろから「川遊び」と関係を強め、河原での祝宴となったと考えられる。このような想像が許されるとすれば、「芋煮会」が盛んとなる背景には、家

は、いものこ（里芋）の栽培が多く、秋になると遊山や秋の味覚の行事として、よく《いものこ汁》が行われ、野外で秋の味を楽しむ。一方、畑作の比率の高い県北内陸平穏地や県南中山間地帯Bでは、秋は季節の味覚として県南の《いものこ汁》にかわり、《きりたんぼ》または《だまこもち》となる。この地方で栽培される里芋は、親株を主として食べる「ずいきいものこ」である。

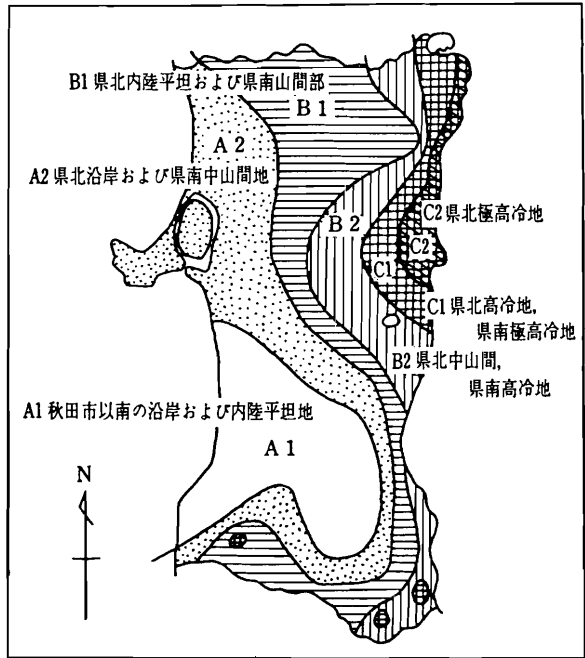


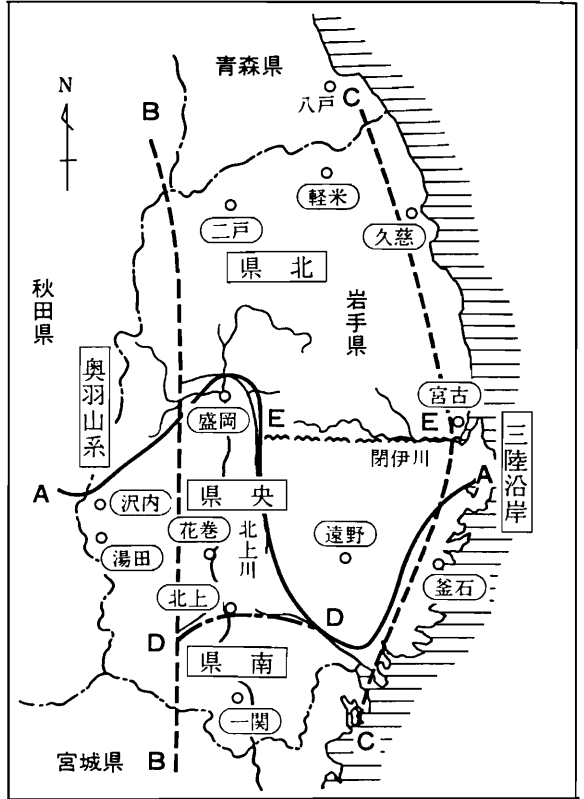
図4 稲作地帯区分図

体験し、秋の「山遊び」には欠かせないものとして津軽でも盛んである。問題の中心は、河原で鍋を囲む習慣が津軽にあるか否かではなく、秋の取れ時に「里芋」を皆で食べる習慣がないのだと私は考えてきた。

もっと正確に言えば、「小さいも」ができないので「芋煮会」がないのではなからうか。このことを証明してくれるのが『秋田の食事』にある「秋田県の地域区分」（図4参照）についての次の記事である。（要約は筆者）

稲作に適した秋田市以南の沿岸および内陸の横手盆地や県北沿岸および県南中山間地帯Aで

図5 食をめぐる岩手の地域区分



はあまり聞いたことがない。ただし、十一月の弘前大学の大学祭の際には、各クラス・サークルの出し物は圧倒的に「きりたんぽ」屋さんが多く、どこのお店が一番おいしいか、皆競いながら頑張っており、その点では「芋煮会」と良く似た性格を見ることが出来るかも知れない。

『岩手の食事』所収の「岩手県の地域区分」(図5参照)では、「県南は米・大麦と、もち文化。県北は雑穀文化(ひえ・そば・小麦・大豆)に二分できる」として、里芋について次のようにある。

つまり、津軽は秋田県北部のさらに北方に当たり、県北の「ずいきいものこ」「きりたんぽ」の世界とは連続するが、県南の「芋煮会」の世界の外側に位置するので、当然津軽に「芋煮会」はないことになる。

一方、秋田名物の「きりたんぽ」は同じ鍋物とは言え、屋内で囲炉裏にかけた鍋を囲み食べるといふイメージが強く、「きりたんぽ」鍋の野外パーティー

県北・遠野―里芋が全くない。

県央―――里芋がある。

県南―――里芋が多い。

ここから、岩手県の県北・遠野地方と県央・県南地方との間に里芋栽培の境界線Aが確かめられる。この線は奥羽山脈Bで中断されるとは言え、先に述べた秋田県を南北に分かつ《いものこ汁》と《きりたんぼ》の境界線とも連なり、東北地方を南北に横断することになるのである。

つまり、これまでわれわれは山形・秋田の県境と宮城県北部を結ぶ線をアイヌ語地名の境界線と呼び、これを古代蝦夷と和人との境界としてきたが、この線よりおよそ一〇〇km北方に、現代の「里芋」の境界線が走っており、またこの線が事実上の「芋煮会」の北限で、おそらくは稲作と畑作の境界線でもあろう。現在の稲作は、品種改良の結果北海道でも行われているが、おいしいお米の産地となれば、この「里芋」の境界線が一つの目安になると思われる。

そもそも「里芋」のルーツは熱帯地方の「タロイモ」にあり、後述する佐々木高明によれば照葉樹林帯で栽培されたとあるが、現在の日本では落葉広葉樹林帯でも栽培され、その北限は道南の渡島半島という。それゆえ、津軽においても「里芋」は当然栽培可能で、事実、作られている畑を見かけたことがある。しかし秋の収穫時には、茎の付いた「づいきいも」の形で、八百屋の店先に並べられ、芋と茎を一緒に味噌汁などにいれて食べるのだそうである。

ところで民俗学の坪井洋文は『稲を選んだ日本人』の中で、福島県大沼郡金山町での聞き取り調査の際、大きな衝撃を受けると共に、「来客や祭礼の折に自慢して出せるようなイモの作れることが生活の理想である」ような、米よりも里芋に多くの価値を置く民俗世界の存在を確信し、後に稲作農耕文化対畑作農耕文化という柳田民俗学の根底を揺

るがす坪井学の出発点となった話を次のように記している。¹³⁾

……こうした話を聞いているとき、六十歳を過ぎたばかりの婦人が、「昔は何といっても、娘たちが嫁に行きたいと願う家は、田が多くて米のできる家ではなくて、うまいイモ（里芋）がたくさんでできる土地を持っている家であった」と語ってくれた。嫁入り前の娘が理想とする婿殿の家は、うまいイモの多くとれる土地持ちであるという条件付きであった。……………

ここからわれわれもまた、坪井と共に里芋の価値が米の価値に優先する世界を認めることができよう。さらに群馬県には「イモは陰の俵」という諺があるという。¹⁴⁾ 里芋が日常的な主食である世界もあるわけである。これに引き比べると、現在の東北の「芋煮会」の世界は、里芋に生活を依存するほどに里芋に高い価値を認めているとも思えないし、また津軽人は東北南部やそれ以南の人たちのように「里芋」を珍重していないと思う。しかし一般に、里芋ができないということとは、稲作ができないのと同じほどに、大きな意味を持っているのではあるまいか。

青森県教育委員会出版の『図説 ふるさと青森の歴史シリーズ3』『北の誇り・亀ヶ岡文化』では、縄文時代晩期の青森でも根菜類の栽培があったとし、その具体例に「ヤマノイモ」「サトイモ」をあげているが、¹⁵⁾ 縄文晩期青森での「サトイモ」栽培を問題としたい。長野の生んだ考古学者、藤森栄一が縄文中期に「里芋」農耕があると主張したことは有名で、縄文期の「里芋」農耕は考古学の常識かも知れないが、これまでの気候風土の考察から、当時の青森での「里芋」栽培は無理であろう。

一方、考古学の寺沢薫は「弥生初期の稲作は思いのほか厳しいものがあり、前期ではその大部分を、中期では五〇

パーセント以上を他のデンプン質食料で補充する必要があった」と述べている。⁹⁵ このことから、前述の弥生前・中期の砂沢・垂柳の水田稲作を見直すと、水田稲作を支えるべき畑作、特に里芋栽培がないことが注目される。先にわれわれは、これらの遺跡には縄文的な石鏃・土偶を伴い、弥生文化として不可欠な石包丁・紡錘車がないことを見てきたが、里芋栽培の欠如からは、それ以上に縄文的な生活が想定されるのである。

三 焼畑農耕と里芋

これまで私は「里芋」にこだわって議論を展開してきた。その理由は、特に「里芋」に注目することを通して、「日本人」米食民族とする伝統的な考えを覆そうとする議論」に私が長いこと魅了されていたからである。具体的には、秋の「いも名月」は「里芋」の収穫祭で、「里芋」は水田稲作に先行する「照葉樹林焼畑農耕」のシンボルとする文化地理学・文化人類学の佐々木高明の議論や、畑作のシンボルである「里芋」のみで正月の雑煮を祝う「イモ正月」の存在を主張した民俗学の坪井洋文の議論である。

佐々木高明は『稲作以前』⁹⁶で稲作に先行した焼畑農耕の存在を主張し、世間に衝撃を与え、上山春平・中尾佐助とのシンポジウム『続・照葉樹林文化』⁹⁷などで、佐々木・中尾の「照葉樹林焼畑農耕文化論」は一世を風靡したが、日本列島の森林植生は照葉樹林帯と落葉樹林帯⇨ナラ林帯の二つからなり、栽培作物も北からの道を想定しなければならぬことから、最近の二人の研究はナラ林文化論に傾いている。ここで、佐々木の考える「照葉樹林焼畑農耕文化論」を紹介しておきたい。

この議論は、オリエントの豊かな半月弧の向うを張った規模雄大な構想である。考古学者が弥生の農耕文化を考え

豆類には大豆・小豆、雑穀類にはアワ・モロコシ・シコクビエ・キビ・ヒエ・ソバ、陸稻等々である。佐々木は水田稲作の前提に陸稻を含む雑穀・根菜の焼畑農耕があり「里芋」がそのシンボルであったとし、それを照葉樹林焼畑農耕と名付けた。

一方、現在の日本の焼畑には陸稻はなく、日本列島内部で陸稻から水稲へと発展した遺跡が発見されないことから、

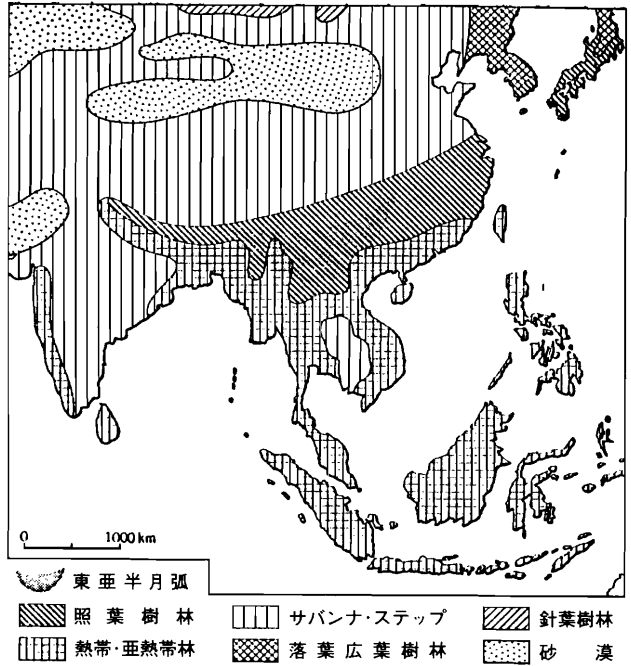


図6 東・南アジアの植生と東亜半月弧

る際に、北九州に穀物の栽培センターを想定し、ここから全国へ穀物栽培はセットとなって普及したとしているのと同様に、中国西南部の雲南省あたりに東亜半月弧という照葉樹林帯の農耕文化のセンター(図6参照)を考え、ここから日本や東南アジアの各地に、雑穀・根菜類の栽培がセットとなって、次いで水稲が、他の文化要素を伴って伝播したとしていのである。

照葉樹林帯とはカシ・シイ・クスなどの薄暗い森林帯で、東南アジアのモンスーン地帯をヒマラヤの南麓部、アッサム、インドシナ半島の北部山地、雲南・貴州・四川、中シナ、南シナ、西南日本と続くものである。ここの焼畑で栽培される作物は、イモ類にはサトイモ・ナガイモ、

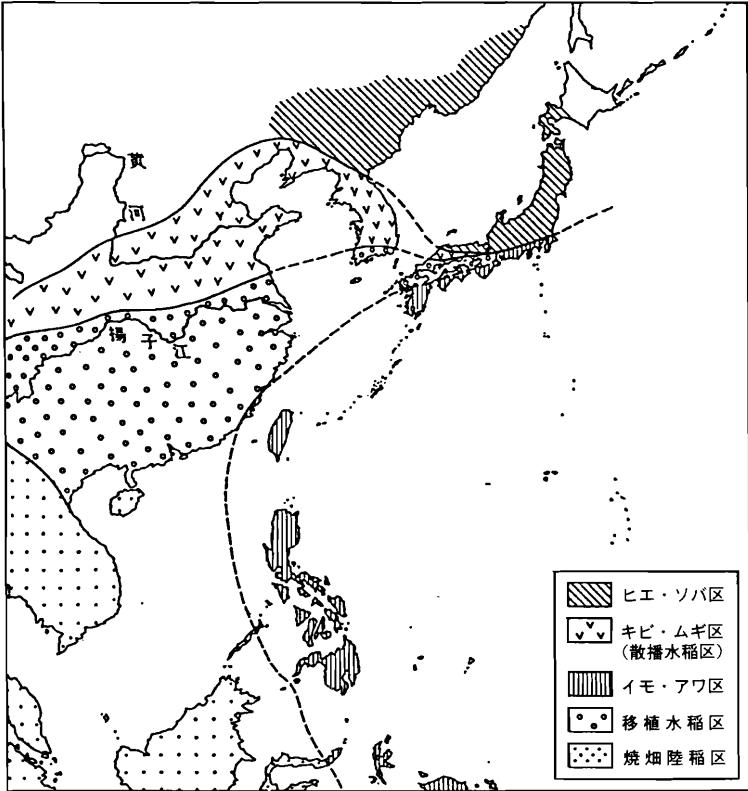
水田稲作は一つの完成された外来文化として日本に入ったことになる。ここから佐々木は、縄文期に焼畑農耕の波、弥生期に稲作農耕の波と、都合二つの波が日本に及んだとし、特に縄文晩期の西日本に展開する凸帯文土器の文化を、陸稻を含む雑穀中心の焼畑農耕文化とし、弥生の水田稲作文化が急速にこの凸帯文土器の分布圏に及ぶことを焼畑農耕文化の存在から説明した。この部分は考古学の方でも大方の賛成を得ていると思われる。

また佐々木は、現在の九州・四国の山地で、アワ・ヒエ・ソバ・大豆・小豆・サトイモ・ムギなどを複雑な輪作方式で栽培する焼畑「コバ」を、日本における照葉樹林焼畑農耕と位置付け、中部地方の飛濃越山地に展開する焼畑「ナギハタ」を、この「コバ」式農耕の落葉広葉樹林帯への適応形態とし、温暖な気候を好むサトイモ・ムギなどを脱落させ、比較的冷涼な気候に適するヒエ・ソバなどに栽培の重点を置いたものとし、また「コバ」や「ナギハタ」を縄文時代の焼畑とし、現在東北地方に見られる焼畑「カノ」「アラキ」をそこから除いている。

しかし北東北の太平洋側の「やませ」地帯は稲作に適さず、伝統的なヒエ食地帯で、この定畑は「ナギハタ式」農耕に近いと思われる。ともあれ、南北に細長く山がちな日本列島は、温暖で水田稲作に向いた地域から「コバ式」農耕や「ナギハタ式」農耕に適した地域へと、さまざまな地域差が考えられる。一方現在の考古学の立場では、まず最初、北九州に穀物の栽培センターが成立し、次にそこから弥生の農耕文化は全国に伝播したとして、水田稲作か「コバ式・ナギハタ式」の雑穀栽培か等々は同じ弥生文化を受け入れる際の地域差としている。

しかし水田稲作や畑作はどのようにして、東日本の縄文の伝統の強い世界に展開していったのだろうか。例えば、水田稲作文化を持つ弥生人が、「コバ式」農耕を行う凸帯文人を追って西日本の世界に広がったとき、生き残った凸帯文人の一部は東日本に移住し、そのことによって「コバ式」農耕や「ナギハタ式」農耕が東日本に広がったのだろうか。一方、縄文中期の「サトイモ」農耕については藤森栄一説があるが、縄文期の「サトイモ」農耕を証明する考古

図7 アジア東部の農耕区



学的な証拠は未だ発見されていない。
ない。

最近では佐々木・中尾の言う「照葉樹林文化論」には批判的な論者が現われている。前述の大林は、日本神話の中で「ウケモチ神」の死体から転生する穀物が、現在の日本の畑作の代表的な作物であるのに、その中に里芋がないことから、里芋を畑作のシンボルとする考えに疑問を呈している⁹⁸。また自然地理学の高谷好一の議論もその一つである。高谷は東南アジアの稲作に関連して、さまざまな文化要素がセンターに流れ込み、そこから一括して各地に伝播するという考えを拒否し、むしろ、自

然条件に適したところにそれぞれの作物が伝播するとしている。

高谷は「東アジアの農耕区」(図7参照)を北から、旧満州の「ヒエ・ソバ区」、華北の「キビ・ムギ区」、華中・華南の「移植水稻区」、さらに環太平洋の「イモ・アワ区」とし、佐々木が照葉樹林焼畑農耕の日本における典型と位置付けた南九州や四国の「コバ」式農耕の世界を、むしろ「イモ・アワ区」に位置付けたのである。これは南から順に、ニューギニア島・フィリピン群島・台湾・薩南列島・南九州・南四国・紀伊半島・東海・伊豆七島と太平洋の西側を取り囲むように連なっているのである。

さらに高谷は「ナギハタ」の分布域を含む山陰・北陸・中部山岳・北関東・東北・北海道渡島地方全体を旧満州中心の「ヒエ・ソバ区」に含め、縄文期の東北にソバが見られるのを、この「ヒエ・ソバ区」から説明している。これは佐々木・中尾の言うナラ林文化に対応するものであろう。なお中尾によれば、雑穀のソバ・ヒエ・アワなどはインドの雑穀栽培センターから照葉樹林帯の東亜半月弧にもたらされ、そこから日本に伝わったとしているが、北の道を考える人は、シルクロードを伝わり北アジア廻りで東北に伝播したとしており、今後の研究が待たれる。

また高谷は、瀬戸内から畿内にかけてを「移植水稻区」としたのは、ここの土壌が水稻に適した花崗岩の地帯であるからとし、弥生の水稻文化が、縄文晩期の凸帯土器の世界に急速に進展したのを、土壌学的な立場から説明し直しており、さらにこの「移植水稻区」が北の「ヒエ・ソバ区」と南の「イモ・アワ区」を押し退ける格好で貫入しているとして、日本の農耕区や弥生の稲作の問題を捉えているのである。つまり佐々木・中尾が照葉樹林帯として一括して捉えていたものを、高谷は「キビ・ムギ区」「移植水稻区」「イモ・アワ区」の三つに分解したわけである。

一方植物系統分類学の堀田満によると、サトイモのうち熱帯域に分布する2倍体のミカシキ群は沖縄から西南日本にかけて分布し、温暖帯に分布するものには、2倍体のセンチク群と3倍体のコイモ群などがあり、前者は九州や四

国の焼畑で栽培され、後者は特に低温に強く、中国大陸から日本にかけて栽培されているという⁹⁰。となると、高谷の言う「イモ・アワ区」は熱帯域に分布するミカシキ群などに対応し、東北の「芋煮会」のイモノコは弥生文化と共に中国大陸から渡来した、低温に強く、温暖帯に分布するコイモ群と考えるべきであろうか。

以上のような批判に応えた結果なのか、佐々木はこれまでの研究を『縄文文化と日本人』⁹¹に纏めるに際して、「非稲作文化」の代表を、これまで畑作のシンボルとして述べていた「里芋」から、クズ・ワラビ・ヤマノイモ・ウバユリ・ヒガンバナなどの「野生のイモ類」にかえ、これらを堅果類と並ぶ縄文時代の主要な食料としてしている。

四 坪井の「イモ正月」

柳田国男が日本民俗学という新しい学問体系の創設を目指し、自らの学問の中心に稲作農民である「定民」を想定し、学問の課題を稲作文化の解明に設定したことに対して、柳田の晩年の弟子、坪井洋文は、日本には「稲を選んだ日本人」と共に「稲を選ばなかった日本人」もまた存在するとし、日本民俗学の枠組みそのものを問い直したのである。中でも、坪井の「いも正月」論は、初期の柳田が主張した「山人」の世界を改めて捉え直そうとの試みである。

ところで青森県の人に、『いも』と聞いて、貴方はどんな芋を連想しますか」と聞くと、青森県は「山芋」の産地なのだが、「ジャガイモ」との答えが返ってくるという。もちろん北海道の人からの答えは、「ジャガイモ」となる。しかし「芋煮会」の盛んな山形や宮城の人も、『いも』とは「ジャガイモ」だと答えるのだそうだ(図8参照)。「ジャガイモ」の原産地は新大陸で、コロンブスによる新大陸の発見以降ヨーロッパを経由して江戸時代の日本に伝わったもので、青森県下北半島の「ジャガイモ」栽培には北海道の開拓との同時代性が感じられる。

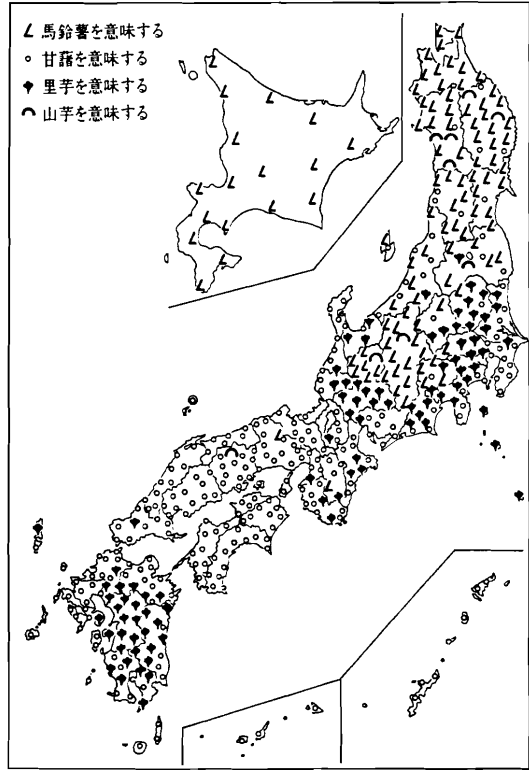


図8 イモの意味

また日本国内には、《いも》とは「さつまいも」だ、とする地域も存在する。「さつまいも」が中国・琉球を経て江戸時代の日本に伝わり、青木昆陽の活躍により各地に植えられ、多くの飢饉を救ったことは有名である。これに対して、北関東の茨城・栃木等の人たちに質問をすると、《いも》とは「里芋」だという。「ジャガイモ」や「さつまいも」を作ったり食べたりしないのではなく、生活に馴染の深いのは圧倒的に「里芋」だというのである。つまり、

現在の東北と北関東との間には「ジャガイモ」と「里芋」という対比が存在しているのである。

以上の予備知識をもとに、次に坪井が明らかにした「いも名月」や「餅なし正月」「いも正月」を紹介したい。「里芋」の収穫祭を秋の「お月見」「いも名月」として行う習慣は、坪井の調査によれば、南東北を北限とし落葉広葉樹林帯も含め日本各地にほぼ均等に見られるという(図3参照)。また大林によれば、²²⁾中国大陸においても秋の「お月見」の風習は広く見られるという。それゆえこの風習は、佐々木が強調する、照葉樹林焼畑農耕に固有な農耕儀礼ではなく、むしろ大陸伝来の弥生文化と関連し、弥生文化の伝播と共に全国化した畑作儀礼、水田稲作を補完する畑作の儀

状に展開し、近畿圏には存在しないが、東では栃木・群馬・埼玉・長野等々、西では和歌山・愛媛・岡山等々の地域に限られ、それより遠方の北東北や北陸地方・九州には見られないという(図9参照)。

坪井は国家が民衆に強要する儀礼と、民衆側のこれに対する対抗儀礼とを以って民俗の考察を試み、京都とその周辺地域を、国家の強要する「餅文化」に《同化》された地域、「餅なし正月」のあるドーナツ地域を、同化の圧力に逆らい、タブー《禁忌》により民衆側の儀礼・民俗が対抗的に保持された地域、それよりさらに遠方を、国家の側の儀礼と民衆側の儀礼とが等価値として《併存》する地域とし、理念的に日本の民俗世界を捉える仮説を提示した。

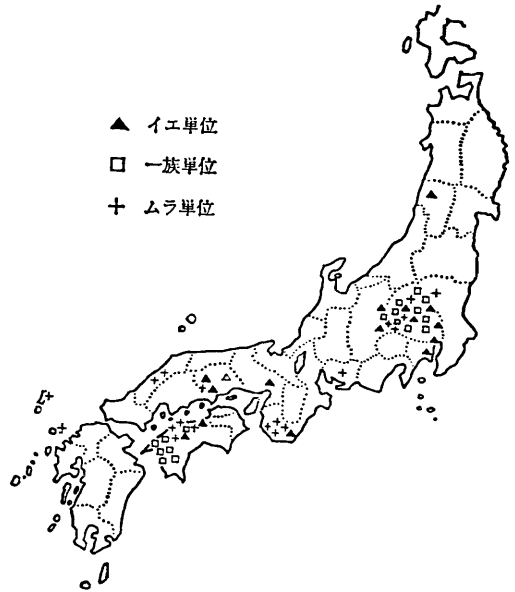


図9 正月に餅を食べることをタブーとする分布

礼と考えて良いのではあるまいか。

「餅なし正月」とは、坪井の定義に従えば「餅」をタブー視し正月に餅を食べない風習で、日本に国家が成立して以来、公の性格を持ち続けた稲作文化の象徴「餅正月」に対抗的なことに特徴があり、坪井の民俗調査によれば、現在この風習は京都を中心にドーナツ

他方「いも正月」とは、正月に「餅」ではなく「里芋」中心の雑煮を祝う風習で、この風習の背景には、坪井の主張する「里芋の方に米よりも優れた価値を認める世界」を想定することができよう。坪井の調査によればこの「いも正月」の分布域は「いも名月」の分布域よりはるかに限定的で、黒潮の流れに沿い、南九州・四国・紀伊半島・東海・伊豆七島・北関東となり、東北地方と中国地方の全域や日本海岸の北陸・北九州には見られないという。

ともあれ、多少のずれはあるとしても、北関東や南九州などの「いも正月」の風習のある世界は、《いも》とは「里芋」だとする世界と重なり、里芋に大きな価値を見出していることは間違いないと思われる。一方「芋煮会」のないわれわれ津軽から見れば、「いも名月」の儀礼を持つ「芋煮会」の世界は、里芋に強い愛着を持っていると思われるが、歳初めの正月行事の儀礼としての重さを考えると、「いも正月」を祝う北関東等々の人々の「里芋」に寄せる思いは、秋の「いも名月」を祝う南東北の人々よりも遥かに強いと考えてよいであろう。

「里芋」を食べない津軽から、東北の「芋煮会」を追及してきたわれわれの立場から、「里芋」に決定的な価値を認める「いも正月」の世界を考えると、「いも正月」とは「里芋」の収穫祭を秋の「お月見」から歳初めの「正月」にずらしたものと一応は考えてみることも出来ると思われる。しかし先に考えたように、「いも名月」を弥生文化・稲作文化に付随した秋の里芋の収穫儀礼と仮定すると、「いも正月」とは、その弥生文化・稲作文化に先立つ畑作文化の儀礼、佐々木という日本列島に上陸した第一派の農耕文化、かつての照葉樹林焼畑農耕・縄文農耕の文化を今に伝えるものと想像してみたくなる。

なお注目すべきは、この「いも正月」の分布域が佐々木の注目した「コバ」の分布地域を含み、高谷の言う「イモ・アワ区」を中心とし、そこから北方に広がったものということである。「いも正月」が縄文農耕と関係が深いと仮定すれば、縄文農耕は「イモ・アワ区」の分布域から明らかのように、黒潮の流れに沿って日本列島に上陸したと想像

できそうで、これはまた、かつて柳田の考えた「海上の道」でもある。この道が、赤米を含む雑穀農耕の道であるとする考えは、次第に市民権を得る方向にあるようである。

ともあれ以上から、日本における里芋の栽培前線は次のように北上したと纏めることが許されよう。

一 縄文時代には、高谷の名付けた「イモ・アワ区」から、さらに北上して坪井のいう「いも正月」の分布域にかけての線に。

二 古墳時代から奈良時代にかけて、アイヌ語地名の境界線上にまで稲作と共に「里芋」の北限は北上した。

三 現在は、このアイヌ語地名の境界線より凡そ一〇〇km北方に「里芋」の境界線が走っている。

五 アイヌ語地名

人間生活を維持して行くに必要な熱源は、狩猟採取の時代でもデンプン食によっており、縄文時代の狩猟採取経済においては、女性の行う木の実などの採取によっていた。日常食が女性労働に依存していたのに対し、蛋白質中心のハレの日の御馳走は、男性の行う狩猟によっていたと思われる。つまり狩猟・採取社会は男・女の性に基づく分業によって成り立ち、原始的な農耕文化においてもこの男女間の分業は続いたと思われる。一方、弥生から古墳時代にかけて本格的な農耕文化の時代になると、この男女間分業は終わり、両者は共に農業労働に専念することとなった。

古墳時代から奈良時代にかけての北東北には、土師器や後期古墳が見られることから、当時の北東北の蝦夷たちはアワ・ヒエ・ソバ・山芋などを栽培する農耕民であったとの伝統的な見方がある。しかし、稲作はもとより里芋栽培

も伴わなかったのだから、その原始農耕の担い手は女性で、生活に必要な熱源のデンプンは、基本的には縄文時代と変わらず、木の実などに大きく依存していたと思われる。ここから当時の蝦夷は、東北考古学の工藤雅樹の言うように、縄文時代とあまり変わらない文化、「統縄文文化」の中にあったと考えるべきなのであろうか。

ともあれ弥生時代後期以降、古墳時代・奈良時代にかけてのおよそ八〇〇年間、気候は冷涼化し、それに伴い稲作前線は南下したが、次の平安時代になると「平安海進」²⁴の言葉があるくらいに気候は温暖化し、東北の稲作前線は再び北上した。しかしこれまでの考察から、アイヌ語地名の境界線は、稲作と「里芋」栽培の北限として八〇〇年間にわたり東北地方を南北に分割しており、この線は本格的な農耕を基盤とする弥生・古墳文化の社会と縄文以来の狩猟採取・原始農耕社会とを分かち南北の境界線であったと考えられる。

アイヌ語地名の境界線をはさんで、八〇〇年の間二つの社会は相對峙していた。このことを北海道考古学の藤本強は、「農耕が開始されて以来、農耕社会は採取社会を侵略することによって拡大した」「弥生文化・古墳文化は縄文文化の採取社会を破壊しつつ東北進した」とし、さらに農耕社会は「東北南部までは比較的短期間に進出したが、それより北にはきわめてゆっくりした形で進むことになる。これは一つには気候条件が大きな原因となっている」と説明している。この長期間にわたる対峙の事実が、境界線以北の住人⇨蝦夷がアイヌ語地名を残した理由と考えられる。形質人類学では、蝦夷（えみし）もアイヌも共に旧モンゴロイドに属す縄文人の直系の子孫であり、一方、現在の日本人・和人は弥生時代に大陸より日本列島に移住した新モンゴロイドに属す弥生人と先住民族の縄文人との混血によるとされ、後になって、東北の蝦夷は和人化し、北海道のアイヌは和人とは別な民族に小進化したとされている。とすると、縄文語と蝦夷語とアイヌ語の三者は非常に近かったと考えられ、アイヌ語地名はこの地域に長くから生活していた人々⇨縄文人⇨蝦夷の付けたもの、と考えられよう。

「はしがき」で述べたように、大林は「アイヌ語地名の境界線に対応するものはない」としているが、私の目に入っただけを最後に二、三挙げることでこの考察を閉じたい。

(一) まず取り上げるべきは、一般言語学の浅井亨「蝦夷語のこと」²⁰である。浅井は、クラスター分析の結果から、アイヌ語地名の境界線は言語面でも大きな断層であることが見えてきたとし、そこから世の常識に対して「北部東北方言は異質か」と挑戦的な問いを立て、「少なくとも東北北部と東北南部はかなりの長期間にわたって別の文化圏ではなかったか」と述べている。この論文は大林の編集した『蝦夷』という本に収録されており、大林がこの論文を取り上げないのは不思議である。

浅井の研究は衝撃的で、アイヌ語地名の問題との関連など、多くの可能性を秘めた新しい研究分野を切り開くものと思われるが、今のところ浅井の研究を引き継ぐべき言語学・方言学の研究はないようで、残念である。一方、考古学の藤本強は浅井のこの議論から大きな影響を受けたらしく、藤本は浅井の議論を度々引用している。他方大林が、敢えて浅井のこの議論を取り上げていないのは、あるいは山田秀三のアイヌ語地名の議論にこれが含まれるとしているからであろうか。

(二) 次に取り上げるべきは、出口晶子の日本の船についての研究²¹である。日本列島における丸木船から構造船への発展を技術面で整理すると、日本列島は三つの領域に区分できるとし、米代川以北の北東北と北海道、サハリン、沿海州、アムール河口などをⅠとし、奄美大島以南をⅡとし、東北南部からトカラ列島までを朝鮮半島を含めⅢとしている。ⅠとⅡは丸木船に舷側板を取付ける地帯で、Ⅲは丸木船に船底板を取付ける地帯であるという。米代川以北は蝦夷の地であると蝦夷自身が宣言したこととの関連を考えるとこの境界線もまた興味深いものである。

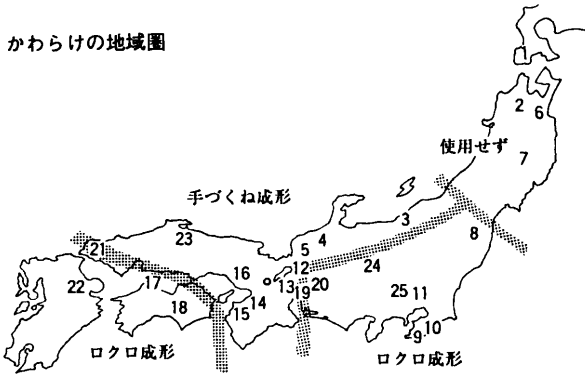


図10 陶磁器からみた分布模式図

(三) 最後に取り上げるべきは、お酒を飲むための使い捨ての土器で、それゆえ都市的な世界の存在を指し示す「かわらけ」の分布である。

中世考古学の小野正敏⁽²⁰⁾は京都を中心に、「手づくね」「ろくろ成形」が同心円的に分布するとして、畿内とその周辺および日本海側には「手づくね」が、瀬戸内以西と東海・関東には「ろくろ成形」が分布するのに対し、東北北部から北は「かわらけ」の使われない地域とし、工藤清泰⁽²¹⁾はこれを「無かわらけ地帯」と名付けている。平安時代の平泉からは「かわらけ」が大量に見つかるのに、なぜ中世になるとなくなるのだろうか。東北北部が「無かわらけ地帯」であるのは、中世を通じてここには都市的な場がなかったからなのだろうか。工藤の研究は北東北に都市的な場がなかったからではなく、むしろ「かわらけ」の代りに中国渡来の青磁・白磁が使用・破棄されたことを明らかにしている。

一方、鎌倉時代の終り頃に北海道の擦文時代は終るが、それと共に北海道から土器は消え、十七世紀に確立するアイヌ文化においても土器づくりはないという。これは大塚和義⁽²²⁾の述べるように、東北アジア全域にわたり十二世紀から十四世紀にかけて、日常生活用具であった土器が忽然と消え、土器から「樺皮文化」という土器文化と決別す

る動きと揆を一にしている可能性があり、東北北部が「無かわらけ地帯」であるのは、東北アジア全域にわたるこの大きな流れに、プロト・アイヌの世界のみならず北東北もまた同時進行的に合流したたなるのであろうか。ともあれ、東北地方全体の中世考古の今後の研究に俟つべきであらう。

むすび

これまでのわれわれの考察は、一言で言えば、北東北には「里芋」耕作が欠如していたという「里芋」欠如論である。「里芋」を持つ「本当の日本」から北東北は仲間はずれになるとする、憂鬱な北東北落ちこぼれ論の一つである。おそらくこのことが原因なのであろう、私は伝統的な蝦夷論に対し、やや特異な立場に立つと思われる工藤雅樹の蝦夷論に、ひかれるものを感じている。しかし「蝦夷とは何か」について、考古学者たちがこれまで長い間にわたり繰り広げてきた論争の世界に、ここで立ち入るのは今は差し控え、別の機会に譲りたい。

ところで坪井洋文の議論によれば、「稲を選んだ日本人」だけが日本人ではなく、「稲を選ばなかった日本人」もまた日本人であることとなるのであるが、しかし実際に坪井が「稲を選ばなかった日本人」の儀礼食物として挙げているものが「いも」だけであることから、結果として日本人とは「稲を選んだ日本人」と「いもを選んだ日本人」の二種類のみから構成されていることになる。坪井は前者の民俗を「オホミタカラノア리카タ」、後者を「クニブリ」と名付けている。

しかし、北東北の蝦夷はこの二つから共に排除されており、どちらにも属していないのである。となると「稲と共にイモも選ばなかった日本人」、第三番目の日本人の儀礼食物は何か、坪井に做ってこのような問いを提起すること

が許されよう。これが本稿を締めくくるに当たって、われわれが今ここで確認することが出来る新しい学問的な課題である。この問題について多少考えているところもあるが、ここでは問題点を指摘するに留め、別の機会に改めて論ずることにした。

ところで、柳田国男が日本民俗学の構想を打ち立てるに際して、日本人⇨稲作民とし、「稲を選んだ日本人」⇨常民の民俗を説明することを以って学問の課題とし、稲のルーツを「海上の道」として南に求めたことは既に述べた通りであるが、一方初期の柳田は「遠野物語」などで、常民論ではなく山人論を展開していた。しかしここにおいても、柳田の世界のなかには、アイヌ・蝦夷は非稲作民であるから当然日本人ではなく、日本民俗学の対象外であるとする考えが無意識にしろあったと思われる。

つまり私が今ここで述べたいのは、もともと柳田の問題意識の中には東北以北の北の世界は入っておらず、まして、アイヌ・蝦夷と山人との比較という視角もなかったであろうということである。それゆえ、柳田の影響下にある日本民俗学においても、東北は独自の意味を持つことなく、単なる日本の一辺境として位置付けられ、現在に及んでいるのである。現在の日本民俗学が東北の独自の価値を問い、蝦夷の民俗を問題とすることができない理由の一つは、この辺りに潜んでいるのではなからうか。

最近では、坪井洋文のように柳田の日本民族⇨単一民族とする単一文化論の批判者は多く、このような考えは学界で多くの支持者を集めているが、例えば坪井が岡山県の出身であるように、論者はどちらかと言えば関東以西に偏在し、また坪井が揚子江上流域の民俗調査を試みたように、列島から西南の方向に視線を向けながら議論を展開しているのが一般と思われる。しかし、照葉樹林文化論を含めてこれらはすべて、大きく見れば柳田の学問の枠組みのなかにあるのである。

- (1) 大林太良「日本の文化領域」(小学館『日本民俗文化体系 1』谷川健一編『風土と文化』一九八六年 所収、後に大林著『東と西 海と山』小学館 一九九〇年に収録。)
- (2) 新野直吉・山田秀三編『北方の古代文化』毎日新聞社刊 一九七四年 所収。
- (3) 「民族論における蝦夷とアイヌ」(高橋富雄編『東北古代史の研究』吉川弘文館・一九八六年所収)、『考古学ライブラリー51』『城柵と蝦夷』ニュー・サイエンス社 一九八八年、『古代蝦夷』河出書房新社 一九九二年など。
- (4) 農山漁村文化協会 一九八八年。
- (5) 中公新書 一九八四年。
- (6) 三四六頁。
- (7) 三二、五二頁。
- (8) 一一八頁。
- (9) 一八三頁。
- (10) 農山漁村文化協会 一九八六年 三五六頁。
- (11) 農山漁村文化協会 一九八四年 三四二、三四三頁「表1食べもの・食べ方の特徴による岩手県の地域区分」による。
- (12) 『稻を選んだ日本人―民俗的思考の世界―』未来社 一九八二年 一〇四頁。
- (13) 同右 一〇四頁。なお、一九八〇年に国立民族学博物館において行われた「日本民族文化の源流の比較研究」のシンポジウムにおいて、宮本常一は「コメを食べるようになって副食が発達したのであって、それ以前にはどうも副食と主食とは区別せられるものじゃなかった」として、「里芋」を主食とする在り方を次のように述べている。
- 「九州から天竜のところまでいっている古生層がずっと通っている地帯ですね、あそこに行きますと、例のサトイモ文化圏になって、サトイモがずうっと出る。これもみなコイモ系のやつで、小さいわけです。ずうっと戦前の話ですが、どこでも食べさせてもらったので記憶はあるんですけど、あれ、まず茹でますね。それから豆腐をつくります、かたい豆腐です。それを交互に串ぎしにしまして、その上へ醤油とか味噌を塗ります、いろいろのそばへ立てて焼きます。焼いたやつを口でしごいて食べながら、お茶を飲むんです。ほかは何も食べません。それを、しきりにいま話の出ている大塔村の篠原、その北側の天ノ川谷からずうっと下ってきた当たり高野のあたりまで。それから、海を超えて木頭、祖谷山、大豊、寺川、その向

- う側へ越えて宇和島へ、それで皆ずうっといって今度は椎葉の北のあたりまでそういう食事をして歩いたことがあるんです。」(佐々木高明編『日本農耕文化の源流』日本放送出版協会 一九八三年 四一七頁。)
- 14 青森県文化財保護協会 一九九〇年。
- 15 「稲作技術と弥生の農業」(中央公論社『日本の古代 4』森浩一編『縄文・弥生の生活』一九八六年 所収。)
- 16 NHKブックス 一九七二年。
- 17 中公新書 一九七六年。
- 18 大林太良『東と西 海と山』(前注(1)参照) 一八四頁。
- 19 「水田が拓かれるとき―東南アジアの農業に弥生稲作のルーツを見る」(集英社『日本古代史 5』佐原真編集『豊饒の大地』一九八六年 所収。)
- 20 「イモ型有用植物の起源と系統」(佐々木高明編『日本農耕文化の源流』日本放送出版協会 一九八三年 所収。)
- 21 佐々木高明『縄文文化と日本人―日本基層文化の形成と継承』小学館 一九八六年。
- 22 『正月の来た道』小学館 一九九二年。
- 23 前注(3)参照。
- 24 「民族論における蝦夷とアイヌ」(高橋富雄編『東北古代史の研究』吉川弘文館 一九八六年 所収。)
- 25 『縄文文化の研究6』『続縄文・南島文化』(雄山閣出版 一九八二年)の「総論」、『UP考古学選書2』『もう二つの日本文化』東京大学出版会 一九八八年。
- 26 大林太良編『蝦夷』シリーズ日本古代文化の研究』社会思想社 一九七九年 所収。
- 27 「日本の伝統的船舶の系譜」『海と列島文化10』『海から見た日本文化』小学館 一九九二年 所収。
- 28 「城館出土の陶磁器が表現するもの」石井進・萩原三雄編『中世の城と考古学』新人物往来社 一九九二年 所収。
- 29 「東北北半の城館―中世後期における」石井進・萩原三雄編『中世の城と考古学』所収。
- 30 「アイヌ文化のダイナミズム」(朝日新聞社編『古代史を語る』朝日選書 一九九二年 所収。)

図の出典

- 図1 山田秀三「アイヌ語族の居住範囲」[『北方の古代文化』(注2)参照)所収。]
- 図2 大野晋『日本語の起源』岩波新書 1957年。
- 図3 坪井洋文「万葉時代の地域社会(東国編)」[『イモと日本人』未来社 1979年所収。]
- 図4 『秋田の食事』(注10参照)。
- 図5 『岩手の食事』(注11参照)。
- 図6 『統・照葉樹林文化』中公新書(注17参照)。
- 図7 高谷好一「水田が拓かれるとき」[『豊饒の大地』(注19)参照)所収。]
- 図8 徳川宗賢編『日本の方言地図』中公新書 1979年。
- 図9 坪井洋文「万葉時代の地域社会(東国編)」[『イモと日本人』未来社 1979年所収。]
- 図10 小野正敏「城館出土の陶磁器が表現するもの」[『中世の城と考古学』(注28)参照)所収。]